
VS(バーサス)

真浦塚真也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バーサス
VS

【Nコード】

N7287G

【作者名】

真浦塚真也

【あらすじ】

真浦塚真也の日常対決エッセイ。

はじめに

お疲れ様です。真浦塚真也です。

さて、今回新しい連載エッセイ『VS^{バーサス}』を始めさせて頂きましたので、ここでちょっと、今回のエッセイについての説明を行いたいと思います。

題名のとおり、このエッセイは『VS』つまり『対決』を念頭に置いたエッセイです。日ごろの生活においているいろんな対決があると思います。むかつく上司、親、マナーの悪い人、自分自身などなど。例を挙げたらキリがありませんが、そういった日常の戦いを、僕なりの観点からばかしく書きなぐっていきたいと考えています。

といつても、飽きやすい性格なので、いつまで書きなぐれるかわかりません。もし、しばらく更新されなかったら、『あつ、こいつ飽きたんだな・・・』とか、『対決することがないくらい不毛な生活を送っているんだなあ』とか思ってくれば幸いです。

と長々と書いてしまいましたが、何はともあれよろしく願います。

はじめに（後書き）

ご覧頂きありがとうございます。
評価・感想など頂けると嬉しいです。

ラウンド1 VS 凄そう男

一週間ほど前、電車に乗ったところ、向かい側に座ったサラリーマン風の男性と目が合った。そのサラリーマン風の男性は、何ともガタイが良く、目は鷹のように鋭く、もしかしたら柔道や空手の段でも会得しているのではないかというくらい、とにかく凄みのある男性だった。その、もしかしたら格闘家風のサラリーマン風の凄みある風の男性、まあ長いので『凄そう男』が、じつと僕のほうを見つめる、いや睨みつけているのである。

「やばい、からまれる。」

一瞬、そう考えた。なぜだ。なぜからまれるのだろう。僕は何もしていないのに。

もしかしたら、僕が気付かない内に何かしているのかもしれない。そういうことは良くある。本当に良くある。人間だったら、一度や二度はそういったことを経験するはずだ。そう考えた僕は、一度自分を見つめ直すことにした。

まず僕が座っている席である。大丈夫、普通の席だ。シルバーシートでもないし、第一、乗っている乗客は皆シートに腰掛けている。だから、シートに関していえば、合格である。

次に、携帯電話を確認した。大丈夫、マナーモードになっている。だが、不備があつてはならない。なんてったって、凄そう男が僕の目の前にいるのだから。僕はそつと携帯電話の電源を落とした。これで、携帯電話も合格である。

次に、一応音楽機器も確認してみた。大丈夫、音漏れはしていない。というより、音漏れなんかするはずがない。だって僕は携帯音楽機器を持っていない。携帯電話も着信用歌を聞くことができないくらい古い機種だ。だから、音楽機器も合格だ。というか、確認する意味がなかった。

つぎに、自分のファッションを見直した。大丈夫、ピアスや刺青

はしていない。根っからの痛がりだから、そこは完璧だ。指をほんのちよつと包丁で切っただけで大騒ぎするような僕だ。そんなものできるはずがない。服装に関しても、ドクロや死神がプリントされた服を着ているわけでもないし、ズボンだって、地元の服屋のセー
ル品だ。これでもかかってぐらいの、『下の上ファッション』だ。だから合格のはずだ。

「FREEDOM」

これだ。これのせいだ。

なんてこった。僕のＴシャツにはデカデカと『FREEDOM』とプリントされているではないか。

これだ。凄そう男が、ぼくのことを睨みつける理由はこれだったんだ。

いくら凄そう男だからといって、見た目はサラリーマン風の男じゃないか。多分今も仕事の途中なんだ。そこで目の前の何にも考えてない顔したやつが『FREEDOM』なんて書かれたＴシャツを着ていたら、『ふざけるな何が自由だ。』って怒るに決まっているじゃないか。

そう考えた僕は、着ていたジャケットのボタンを全部留めて、『FREEDOM』の文字を隠した。

よし、これで完璧だ。不合格なところは何も無い。強いて言えば顔だけだ。僕は満足な気持ちで顔を上げた。

なぜだ。なぜなんだ。

凄そう男は、尚も僕を睨み付けている。

どこだ。どこがいけなかったっていうんだ。

顔か。顔がいけないのか。顔が不合格だって言うのか。仕方ないじゃないか。遺伝じゃないか。生物の宿命、運命じゃないか。

そう思った僕は、ついに強硬手段に打って出た。あえてこちらも、

過ごそう男を見つめるのである。目には目を、歯には歯を作戦である。

見詰め合う、凄そう男と僕。
流れる時間。

ついに。

目をそらした。
僕が。

はつきり言つて、人と長時間目をあわせるのが苦手だ。なんだか
気恥ずかしくなる。ましてな同姓と長時間目を合わせるのは正直つ
らいし、そういった感情は申し訳ないが持ち合わせていない。

ついに追い詰められた。かくなる上は、最終手段である。

僕は、おもむろに携帯電話を取り出し電源を入れた。

そして。

携帯を操作し始めた。

理由も無く。

とりあえず。

名づけて、『時間が来るまで携帯電話でつなごう作戦』である。
ネーミングセンスはこの際仕方が無い。だって僕はそれほどまでに
追い詰められていたんだから。

結局、凄そう男は、僕を睨みつけたまま、僕の降りたことが無い
駅で途中下車してしまった。なぜ、僕を睨みつけていたのか、その
真相は謎である。

ただ、後日気づいたことがある。それは、僕が携帯電話を確認す

る必要はなかったことである。どう考えても、凄そう男からは僕の携帯電話がマナーモードになっているかどうかは知る由が無いのだから。もしそれができたら、透視能力である。

だが、それはない。ありえない。だって彼はあくまで『凄そう男』なのだから。そんなことができたら、彼はまさに『凄い男』の仲間入りである。

「現在の真浦塚真也の対戦成績」

1戦無勝1敗

ラウンド1 VS 凄そう男（後書き）

ご覧頂き有難うございます。

評価・感想など頂けると嬉しいです。

ラウンド2 VS あんこ

昔からなのだが、よく名字を間違えられる。それも、なぜか入れ替えられて間違えられるのである。

どういふことかといえば、『真浦塚真也』を例にしてみると、いや、『真浦塚』なんてややこしいのを使うと分かりにくいし、所詮は安易な考えで付けたペンネームであるので、ここはとりあえず『山田真也』とさせておくと、『田山真也』、つまり名字を入れ替えられて間違えられるのである。

なぜなのかと何回かは考えてみた。しかし答えなどは出るはずもなく、最近では昔友人に言われた『お前って山田（仮）っていうより田山（仮）って顔してるんだよな。』という返答をとりあえずの答えとして生きている。ただ、田山（仮）って顔がいたいどころへんで区別されているのか、その辺はまだ分かっていない。

とまあ、このように僕はよく名字を間違えられて生活している。

ただ、名字を間違えられることに關しての免疫が付いたせいとか、最近では別段気にすることもなくなってきた。さらにいえば、たまにしか会わない、期間で言えば給食の牛乳をおいしくアレンジするイチゴとかチョコレートの粉ぐらいの、『ごくまれ』ぐらいの人には、もう田山（仮）真也として挨拶してしまっている。

ただ、こんな他には何の役にも立たない免疫をもっている僕にとっても苦手な場所は存在するの。それは、言わずと知れた公共の施設である。

つい先日のことであるが、僕は歯医者に行った。なぜ歯医者に行ったかと言えば、歯が痛かったからである。僕は病院が嫌いだ。だから極力我慢をする。今回も前々から歯は痛かった。だから極力我慢をした。そしたら全力で痛くなった。だから、僕は歯医者に行ったのである。

平日、しかも午前中ということで、歯医者の待合室には僕を含め

3名しかいなかった。

受け付けで初診だということを伝え、【今日は歯は痛みますか？】等の『当たり前だ！』と答えたくなるような質問だらけのカルテを書かされしばらく待っていると、診察室から日本人にしては顔がシユツとした医者、まあ有名で言えばアンジェリナー・ジョリーみたいな、つまり和製アン、要するに『あんこ』が出てきた。

そして、『あんこ』は手にしたカルテに目を落とし、高らかに名前を呼んだのである。

「田山（仮）さん、田山（仮）真也さ〜ん。」

「で、でたあー。ったく！またかよ。」

田山（仮）真也の名前が出た瞬間、僕は心の中でそうつぶやいた。なぜ、カルテに目を落としたにもかかわらず、田山（仮）なのか、そこには山田（仮）と書いてあるのではないのか。

そんなことを思っている僕を知ってか知らずか、『あんこ』は待合室を不思議そうに見回し、首を傾げながら、

「あれえー、おかしいなあ。田山（仮）さ〜ん、田山（仮）真也さ〜ん。」と相変わらず名字を入れ替えて呼ぶのである。

くそ！こうなりや長期戦だ。『あんこ』が俺の名字に気付いて謝るまで、診察室に入ってやるもんか！もう、歯の痛みどころではないのだ。こっちは名字を間違えられているのだ。僕の名字は山田（仮）なのだ、『山にある田んぼ』なのだ。『田んぼだらけの山』ではないのだ。

しかし、そんな気持ちとは裏腹に『あんこ』はまだ呼び続けているのだ。

「田山（仮）さ〜ん。いませんかー。田山（仮）さ〜ん。」

どれだけ田山（仮）と呼ぶのだろうか。まったく。そんなに『田んぼだらけの山』がいっぱいあったら、日本の食料自給率はもっと安定しているだろうが。

「田山（仮）さん。いないんですね。田山（仮）さん。」

若干『あんこ』がいらいらしはじめてきていた。無理もない。だって本人はここにいるのだから。しかし、ここで退くわけにはいかない。だって今日は頑張るって決めたんだもん。

『あんこ』はもういらいらを隠すことは止めたらしい。明らかに不機嫌である。そしてその不機嫌さでまた名前を呼びはじめたのである。

「田山（仮）さん。田山（仮）さん。山田（仮）真也さん。」

えー！なに、それ。

まさに『えー！』である。なんなのだろう、そのいきなりの方向変換は。自動車教習所の教官もびつくりのテクニックである。

もちろん、僕自身もびつくりである。しかし、名前を呼ばれてしまった以上、返事をしないわけにもいかない。それを無視できるほど、僕は倫理を捨てちゃいないのである。

「はい…。」

我ながら何とも小さい声である。

「何回も呼んでたんですから、すぐに来てくださいよ。」

『あんこ』はそう言つと、自分の役目は終わったかのようにササッと診察室に戻ってしまった。

なんてヤツだ。これじゃ僕が悪者じゃないか。こんな僕にだってプライドってもんがあるのだぞ。

そこで、僕は自分のプライドを思いっきり込めて、こう言つてやったのである。

「…すいません。」

「現在の真浦塚真也の対戦成績」
2戦無勝2敗

ラウンド2 VS あんこ(後書き)

御覧頂き有難うございます。 評価・感想等頂けると嬉しいです。

ラウンド3 VS 節分の古くからの風習

どう思われているか分からないが、僕は以外と日本の古くからの風習を大事にする人間である。お盆休みには実家に帰ってお墓参りに行くし、お正月はおせち料理以外はなるべく口にしないようにしているし、お中元の季節にはカルピスとハムを何となく食べるようにしている、僕はそんな人間である。

そんな日本の古くからの風習を気にする僕は、節分もちゃんに行うべきだと考えている。ちゃんと春を迎えられるかどうか、それは節分の出来にかかっている、と僕は考えている。

そんな僕は朝から準備を始めた。朝ご飯にイワシを食べ、昼ご飯にイワシを食べ、そして夕ご飯に恵方巻きと福豆を食べる為にスーパーへと出掛けたのである。

無い。無いのである。福豆がスーパー、コンビニエンスストア、ドラッグストア、どこにも無いのである。しまった。古くからの日本の風習を大事にしているのは僕だけではなかったのである。それは喜ばしいことではあると思うのだが、僕にとって一大事なのである。

まずい。非常にまずい。このままでは今年1年鬼と同棲しなくてはいけなくなってしまう。ただせさえ狭いの。ただせさえお化け屋敷系統が苦手なのに。部屋が黒と白を基調とした家だから、赤や青は浮いてしまうのに。

どうしよう。ああ、どうしよう。そんな途方にくれた僕は福豆が無いドラッグストアを見渡した。すると、ある商品が僕の目に飛び込んできたのである。

『水煮大豆』

これだ。これである。

『乾燥椎茸』が水で『椎茸』に戻るように、『海苔』を焼いて『焼き海苔』になるように、『水煮大豆』を炒めることで『大豆』になり、『大豆』を炒めることで『福豆』になるのではないか。

そう考えた僕は、『水煮大豆』を購入し、フライパンでじっくり炒めることにした。

20分後。

出来た。なんとか出来た。ただ火力のせいか、『福豆』というよりは『黒豆^{こくまめ}』になってしまったような感じも受けた。まあ、でも大豆を炒めたのだから、これは間違いなく『福豆』である。食べた苦味だって、人生の苦汁を表しているに違いないのである。僕はそう信じたい。

こうして、僕の節分は幕を閉じた。ただ、これで鬼が逃げてく

れるのかは疑問ではあるが。

明日からの生活に多少の心配があるが、まああんまり未来のことを話していると鬼に笑われてしまうので、そこには触れないでおこうと思う。ただ、もし街の何処かで金棒でお尻を叩かれている音がしたら、それは多分鬼と半同棲してしまった真浦塚真也が、鬼にお仕置きを受けている音だと理解して頂きたい。その時はそのエピソードをまたエッセイにしてみようと思う。まあ、鬼がこんなくだけないエッセイを書くことを許してくれる保証はどこにもないのだけれど…。

「現在の真浦塚真也の対戦成績」

3戦無勝2敗（1戦は判定待ち）

ラウンド3 VS 節分の古くからの風習（後書き）

御覧頂き有難うございます。 評価・感想等頂けると嬉しいです。

ラウンド4 VS文明ゆとり製品

つい先日のことであるが、僕は急いでいた。なにをそんなに急いでいたのかと問われれば、そんなに大したことではないのだけれど、とにかく僕はかなり急いでいた。

いや、急いでいたと言うより、追われていた。なにに追われていたのかと問われれば、これは答えることができる、仕事に追われていたのである。

いや、あの状況は仕事と自分自身の抜きつ抜かれつの、正月の駅伝ランナーも真つ青のレースを展開していたと断言してもいい、いや、断言する。『師走』とはよく言ったものである。

そんなレース展開を3時間続け、ようやくゴールが見えてきた。あとはパソコンのボタンを押して、印刷して終了である。

僕はホッと一息ついて、マウスを握った。

動かない、動かないのである。

パソコンの画面の、あの無機質な白い矢印が動かないのである。マウスを右に動かしても動かず、マウスを左に動かしてもピクリともせず、上に動かしても下に動かしてもしまいには宙に浮かせても微動だにしないのだ。

やられた。僕は頭を抱えこんだ。

『文明のゆとり製品』にやられた。僕は頭をかきむしった。一応説明しておくが、ここでいう『文明ゆとり製品』とは、文明としての技術は滅法すごいが、些細なことでダメになってしまう、つまり今の現代人に似たような、つまりアナログ世代が大嫌いな、つまり僕に滅法すごい技術を備え付けたような製品のことである。因みにこの『文明ゆとり製品』という言葉は僕の造語である。検索しても出てこないと思うので、注意願いたい。

とにかく、こうなってはもうどうしようもない。僕は思いっきりさじを投げ付けようとした。

いや、ここで諦めてはいけない！僕は壁に掛かった時計に目を見る。大丈夫！まだ、8時55分だ。今からこの『文明ゆとり製品』を立ち直らして、印刷している間に着替え、印刷が終わった書類を机にしまい、事務所の鍵を掛けて、電車に飛び乗る。ここまです分、いや10分で終わらせれば間に合う、絶対に間に合う！

僕はありったけの頭脳を用いて、マウスと対峙した。

まず、もう一度マウスを動かしてみる。ダメだ、動かない。

そして、軽くパソコンを叩いてみる。ダメだ、動かない。

そして、今度こそマウスを動かしてみる。ダメだ、動かない。くそっ、万策尽きた。俺はまた頭をかきむしった。

そもそも、僕に『文明ゆとり製品』を与えた会社が悪いのだ。

僕は文明の力にからつきし弱い。軟弱だといってもいい。家にパソコンは無いし、つい最近までipodとipadの違いもよく分かっていなかったし、今だにMDを愛用しているし、大学の卒業論文もフロッピーディスクを使って教授を困らせた、いや本当はパソコンが上手く使えないから原稿用紙に手書きではいけないだろうかと真剣に考えた、僕はそんな男なのだ。

そんな男にこんなハイテクな製品を与えるなんて、馬に念仏、豚に真珠、真浦塚真也に文明ゆとり製品である。全くもって馬鹿馬鹿しい、やめだやめだ。僕はそう独り言を1人つきりつぶやいて、本日2度目のさじ投げを試みた。

いや、いかん、いかん！何を考えているのだ！僕はブルブルンと頭を振った。

焦るな、焦るな、まだ時間はあるじゃないか。時計に一瞥をくれてやりながら自分自身に言い聞かせるようにそっと呟く。

ほら見る、まだ9時5分じゃないか。

…。

… 9時5分？

… 9時5分！

しまった！9時5分である。正真正銘9時5分である。

下らないことに時間を費やしてしまった。だがしかし、まだ間に合う！さっきは8時55分といったが、準急にさえ乗ってしまえばまだ間に合う。乗り換えのダッシュと人ごみの窮屈ささえ我慢すればまだまだ間に合うのである。

僕は深呼吸を1つして、またパソコンと対峙した。

まずは相手のことを分析しなくては。僕はまじまじとパソコン見つめる。

見れば見るほど憎たらしい。見た目はテレビやゲーム機とたいして変わらないくせに、中身だけは高性能になりやがって。人間は外見よりも中身を重視されるが、お前は機械なのだから、内面に合った外見をしていればいいのだ。ああ腹立たしい。どこかにこいつをギャフンと言わせる攻略本などないだろうか。

その時僕の中に電気が走った。そうだ、攻略本だ、本だ。僕はどこにそんな俊敏さがあつたのだらうという華麗な動きで、書庫へと向かった。

あつた、取り扱い説明書である。軽量化軽量化と囁かれ、小さい面積で大きな容量と叫ばれる昨今に一石を投じるようないやにデカイ図体をお持ちの、アナログ大好き人間の強い味方の取り扱い説明書さんである。

急いで机に置き意気揚々とページをめくる。読書が趣味で、広辞苑で2時間暇潰しをしたことのある僕にとって、取り扱い説明書の厚さは実に心地が良かった。

あつた。困ったときのQ&Aコーナーだ。僕は舐め回すようにページに目を通し、ついにお目当てのQ&Aを見つけた。

Qマウスが動きません。

Aマウスがちゃんと接続されていますか？

いやいや。

いやいや、いやいや。

苦笑いである。いや、もはや失笑である。

馬鹿じゃないのか。ちゃんと接続されていますか、だと。ついさっきまで羨望の眼差しで見ていた取り扱い説明書だが、もはや失望である。こんな奴に『さん』などと敬ってしまった自分自身すら腹立たしさを感じる。

だが、万が一ということもある。僕は一応マウスの接続部に目をやる。

あれ？

マウスがどこにも繋がっていない。どことも接続していないのだ。

いやいや、そんなはずはない。そんなミスをするはずがない。これは、あれだ。『文明ゆとり製品』はハイテクだから、きつとワイヤレスなのだ。頭の中で必死で弁解しながら、僕は恐る恐るマウスの先端を接続部に近付ける。

繋がった。音もなく繋がった。マウスを動かしてみると、まるで水を得た魚のように縦横無尽に動き回る。

啞然である。ふと鏡に映った自分の顔を見る。笑顔でも泣き顔でも困惑顔でもない顔が映っている。失笑ならぬ失顔である。

時計に目をやった。ああ、もう9時40分だ。どうやっても間に合わない。20分じゃどうにもならない。絶対に観ることができない。

僕は会社の椅子にドテツと座りこんだ。

愛のない時代に生まれたわけじゃないのに。

この無駄な時間を返してくれ、貴方に合わせてくれと懇願したとしても、『承知しました。』と答えてくれる人は、この日の僕の目には映らないのである。

「現在の真浦塚真也の対戦成績」

4戦無敗3敗（1戦判定待ち。ただし敗戦濃厚）

ラウンド4 VS文明ゆとり製品（後書き）

ご覧頂きありがとうございます。評価・感想等頂けると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7287g/>

VS(バーサス)

2011年12月27日21時50分発行